滻水（さんすい）

滻水〔一〕は京兆の藍田谷から出て、北に向かい灞（は）（水）に入る。

楊：滻水が灞水に入るというのであれば、つまり灞水は滻水より大きいのだが、『水経』は灞水篇を立てず、灞水は、渭水に付属してみえる〔二〕だけで、ここでも少しふれている

『漢志』には「滻水は①南陵県の藍田谷に出る〔三〕」という②。

①楊：今本『漢志』では「沂水（ぎ）」と作るが、誤りである。以下に詳しい。

②楊：両漢〔四〕に（南陵）県は京兆尹に属し、後漢に廃され、今の咸寧県〔五〕の東南にある。（滻）水は、藍田県〔六〕西南の秦嶺から出る。今の名前では対家河〔七〕がこれにあたるが、（この川に）滻水という名はない。今は別の滻水があり、酈道元が指す滻水の西に存在する。酈道元は『渭水注』にこのことを載せ、「俗にこれを滻水というのは、まちがいである」〔八〕という。二つの川はどちらも北流して霸水に入り、西側の川が東側の川に比べ長いので、それで酈道元の当時にすでに滻水という呼称があった。酈道元がこれを俗称であるとして反駁し、東側の川が滻水の主たる名としていることには、必ず他に根拠があるはずだが、今では考証不可能である。

西北に流れてもう一つの川と合流する、（その）川は西南の莽谷（もうこく）〔九〕に出て、①東北に流れ

て、滻水に注ぐ。②

①楊：この水もまた今の藍田県西南の秦嶺に出る。

②孫星衍は「滻水は藍谷に出る。今の呼び名では藍水がこれにあたる。莽谷水とはつまり輞川（もうせん）である」という。熊：まちがいである。今の藍水は霸水であり、輞川は、輞谷水（もうこく）（輞峪河（もうよく））で、どちらも『渭水注』にみえていて（一〇）、どうしてこれを二つの水（霸水と滻水）にあてることができるだろうか。

（一）滻水についての議論は複雑である。霸水は現在の覇河。その覇水に西側から流入するのが酈道元のいう滻水であり、両水が北流すると、そこに荊渓（けいけい）水が流れ込む。この川を滻水とする説を酈道元は俗説として否定するが（後注（八）参照）、『校箋図釈』は、これが今の滻河であり、酈道元のいう滻水は今の輞峪河にあたるという（二五二頁）。

（二）巻一九『渭水注』に「又東過霸陵県北、霸水従県西北流注之」という『水経』の文があり、続けて「霸者、水上地名也。古曰滋水矣」から始まり、「覇水又北、入于渭水」に終わる『注』が記される（『訳注　渭水篇下』二九一～三四二頁参照）。

（三）『漢志』上・京兆尹南陵県に「文帝七年置。沂水出藍田谷、北至霸陵入霸水。霸水亦出藍田谷、北入渭」とある。

（四）「両漢」は「西漢（前漢）」のまちがいである。楊守敬集が指摘する。

（五）咸寧県は現在の陝西省西安市長安区（長安県）の一部である。

（六）藍田県は西安市の東南にある県。秦代より県が置かれている。

（七）『校箋図釈』では現在の川名を藍田県の輞峪河とする（二五二頁）。この川は秤屋水、輞川河ともよばれ、王維が別荘を置いた輞川として知られる。

（八）巻一九『渭水注』に「荊渓水又北入覇県、又有温泉入焉。水発自原下、入荊渓水、乱流注于覇、俗謂之滻水、非也」とある。

（九）『校箋図釈』は、莽谷を輞峪に同じとする。

（一〇）巻一九『渭水注』に「（覇）水出藍田県南藍田谷。所謂多玉者也。西北有銅谷水、次東有輞谷水、二水合而西注」とある。

滻水はまた北に向かい藍田川を経て、

熊：『渭水注』で霸水を述べていて、そこにも「藍田川を経る」という文がある（一）。おそらく霸水は藍田県の東にあり、滻水は藍田県の西にあって、二つの河川とも藍田を過ぎるので、どちらにも藍田川の名があり、そのためどちらでも「藍田川を経る」というのだろう。

北流して灞水に注ぐ。『漢志』に「滻水は北に向かい、灞陵に至り①灞水に入る」とあ

る（二）○②

①戴は「灞」を改めて「霸」と作る。下も同じ。霸陵県は『渭水注』に詳しい（三）。

②全祖望『鮚埼亭集』（四）に以下のようにある。『漢志』京兆尹南陵県条に「沂水は藍田谷に出て、北に向かい霸陵に至り、霸水に入る。霸水もまた藍田谷に出て、渭水に入る」といい、顔師古は、「〝沂〟の反切は〝先歴〟」という（五）。すなわち「沂」字であって音は「涅」である（六）。諸書を考察してみても、霸水に沂水があるというのは聞いたことがなく、それでこれについて地理学を研究する者にただしても、その名称を証明できる者はない。「〝沂〟とは〝涅〟に通じるもので、涅水は藍田に出て、西に向かって嶢関を過ぎ、また霸水に合流する。今世では多くの場合には省略して〝泥〟としていて、この音が転じて〝涅〟となった」という者もあるが、この説は紆余曲折の結果求められたもので、私は敢えて信じない。さらに『漢志』では泥水は北地郡郁郅県の北蛮中に出ていて（七）、遠すぎる。そして書体の点でも根拠となるものは全くない。そこで近いところで『水経』を理解するために、その滻水篇を取り出して読んでみると、『漢志』の文をそこでも引用して、直に滻水としていて、沂水ではない。すなわち六朝の旧本ではもともと滻水であったことがわかる。そもそも「玄霸」「素滻」と昔から二つの川を並べて称し（八）、漢家においてもこれを祭祀の対象にしているのは、所謂「長水（水の長）」だからである。これは地志の例においては必ず並んで書かれていて、涅水は青涅軍によって歴史に登場する（九）が、その出現はやや遅い。まして酈道元は顔師古より前の人であり、専門に『水経』の学を治め、彼が『漢志』を引くには最も慎

重であるのだから、どうしてこれをまた疑わなければならないのだろうか。

楊：『説文』では「滻水は京兆の藍田谷から出て霸（水）に入る」とあり、この沂水はみえない（一〇）。また『三輔黄図』、「上林賦」張揖注では「滻水は藍田谷に出て、北に向かって霸陵に至って霸（水）に入る（一一）」という。段玉裁『説文解字注』でもまた『漢志』の「沂」を「滻」の誤りであるとする（一二）。故に銭坫（一三）、洪頤煊（一四）、汪遠孫（一五）、陳澧（一六）はみなその説と同じである。徐松は段玉裁の手跡札記に拠り、「『水経』渭水篇を按ずるに、泥水と滻水はどちらも藍田谷を出て霸（水）に入る（一七）。『漢志』は〝沂〟とするが、〝沂〟は〝泥〟の声の誤りであろう。〝沂〟は〝析〟ともまちがえられるので、それで顔師古は〝音は先歴の反〟という。これはまさに〝泥水と滻水はどちらも藍田谷から出て、北に向かって霸陵に至り霸（水）に入る〟とすべきところである。今本『漢志』では滻水が脱していて、酈道元が根拠とする『漢志』では沂水が脱していて、それで泥水を述べる個所では『漢志』の文を引用せずに、滻水篇で『漢志』の文を引用している。そして宋敏求『長安志』によると、〝酈道元が『注』で述べている泥水には脱しているところが多い〟（一八）という。脱しているところにあるかも知れないではないか。〝沂〟を正して〝泥〟とし、また〝滻水〟を補えば、正解に近いのではないか」という（一九）。泥水は滻水より小さく、それで『漢志』や『説文』に滻水はあるが泥水はない。また霸水は西北に流れていて、泥水が霸水に入るのは藍田の東であり、霸陵とは関係しない。滻水が霸陵で霸水に入るのは藍田の西北である。どうして並べて一つにして論じ、「泥水と滻水はどちらも北に向かって霸陵に至り霸水に入る」ということができよう

か。段氏のこの説は大きな誤りである。趙氏は顔師古の説を庇護し、「沂」字は「涅」とも作るといい、これは『渭水注』にみえる（二〇）。今『渭水注』はちゃんとしている。どうしてかつて「沂」は「泥」にも作るという文があったというのだろうか。これはあまりに隘路に入りすぎたものである。

（一）巻一九『渭水注』に「霸水又北歴藍田川、逕藍田県東」とある。

（二）『漢志』上・南陵県条に「沂水出藍田谷、北至覇陵入覇水」とあり、同条の顔師古注に「沂音先歴反」とある。

（三）『渭水注』に「又東過霸陵県北、霸水従県西北流注之」以下、数箇所にその名がみえる。

（四）『鮚埼亭集』は全祖望の文集。浙江省奉化の古地名である鮚埼に由来する。現存するのは内編三八巻（清嘉慶九年余姚史夢蛟校刻本）と外編五〇巻（董秉純釐定、蒋学鏞審定、蕭山汪継培刊刻本）がある。「漢志京兆南陵県之下」から「寧複有可疑哉」までは『鮚埼亭集』巻三〇にみえる。

（五）前注（二）参照。

（六）以上の音に関しては後文の楊疏を参照。

（七）『漢志』上・北地郡に「郁郅、泥水出北蛮夷中。有牧師菟官。莽曰功著」とある。

（八）『文選』巻一〇潘岳の「西征賦」に「南有玄灞素滻、湯井温谷」とある。

（九）『通鑑』巻九九晋永和一〇年に「桓温別将攻上洛、獲秦荊州刺史郭敬、進撃青泥、破之」とある。『渭水注』は

涇水について「涇水出藍田山之東谷、俗謂之劉谷、西北与石門谷水合。石門谷水東即銅谷水也。涇水又西逕嶢関北、歴嶢柳城、東西有二城、魏置青涇軍于城内、世亦謂之青涇城也。秦二世三年、漢祖入自武関、攻秦、趙高遣将距于嶢関者也。土地記曰、藍田県南有嶢関、地名嶢柳、道通荊州。晋地道記曰、関当上洛県西北。涇水又西北流入霸」という。

（一〇）『説文』巻一一下・水部に「滻、水。出京兆藍田谷、入霸。従水産声」とある。

（一一）『三輔黄図』巻六に「滻水亦出藍田谷、北至霸陵入霸」とある。『文選』巻一班固「西都賦」の「於是睎秦嶺、睋北阜。挟澧灞、拠龍首」の張揖注に「豊水出鄠南山豊谷。漢書曰、灞水出藍田谷。山海経曰、華山之西、龍首之山也」とあるが、巻八司馬相如「上林賦」張揖注には該当する文はみえない。

（一二）『説文解字注』滻の項に「沂者、滻字之誤。水経注引志可証」とある。

（一三）銭坫（一七四一～一八〇六）は清代中期の金石学者。『説文解字斠詮』巻一一滻に「水出京兆藍田谷入灞、従水産声。水経地理志同」とある。

（一四）洪頤煊（一七六五～一八三三）は清代の学者。『漢志水道疏注証』巻一「京兆尹南陵県滻水」の割注に「旧本誤作沂水」とある。

（一五）汪遠孫（一七八九～一八三五）は清代の学者。『漢書地理志校本』巻一南陵県の注に「旧注沂音先歴反。案先歴是顔所拠作析水矣。水経滻水注引志作滻。説文亦作滻。析滻声相近而誤沂。又析字形近而誤」とある。

（一六）陳澧（一八一〇～一八八二）は清代の学者。『清史稿』巻四八二に伝がある。『漢書地理志水道図説』巻三京兆尹南陵の注に「沂当作滻。今滻水」とある。

（一七）涅（泥）水については前注（九）の引用にみえる。滻水は「覇水又左合滻水、歴自鹿原東」とあるが「藍田谷を出て覇水に入る」の一文はない。

（一八）『長安志』巻一六は「劉谷水、一名泥水、出県東南劉谷。水経注曰、水出藍田山之東谷、俗謂之劉谷。西北与石門水合。銅谷水出県東銅谷。水経注曰、石門谷東有銅谷水、合軽谷水西注泥水」とある。ここに引かれる巻一九の『注』文はもと脱していたが、全は『長安志』によって補った。これについては『訳注　渭水篇下』の二九五頁、二九八頁、三〇二頁注（一四）を参照されたい。

（一九）徐松『新斠注地理志集釈』巻二「滻水出藍田谷北至覇陵入覇水」条にほぼ同文がみえる。

（二〇）巻一九『渭水注』下の「涅水又西北流入覇」の疏に「趙云、按漢志、京兆南陵県、沂水出藍田谷、北至覇陵入覇水。而是注涅水源流、正与班固所称沂水合。沂・涅音同」とある。なお、趙の引く『漢志』上・南陵県条に付した顔師古注には「沂音先歴反」とある。